

おきなわの木

～森からはじまる 木のある暮らし～

世界に誇る
やんばるの森の
"これまで"と
"これから"

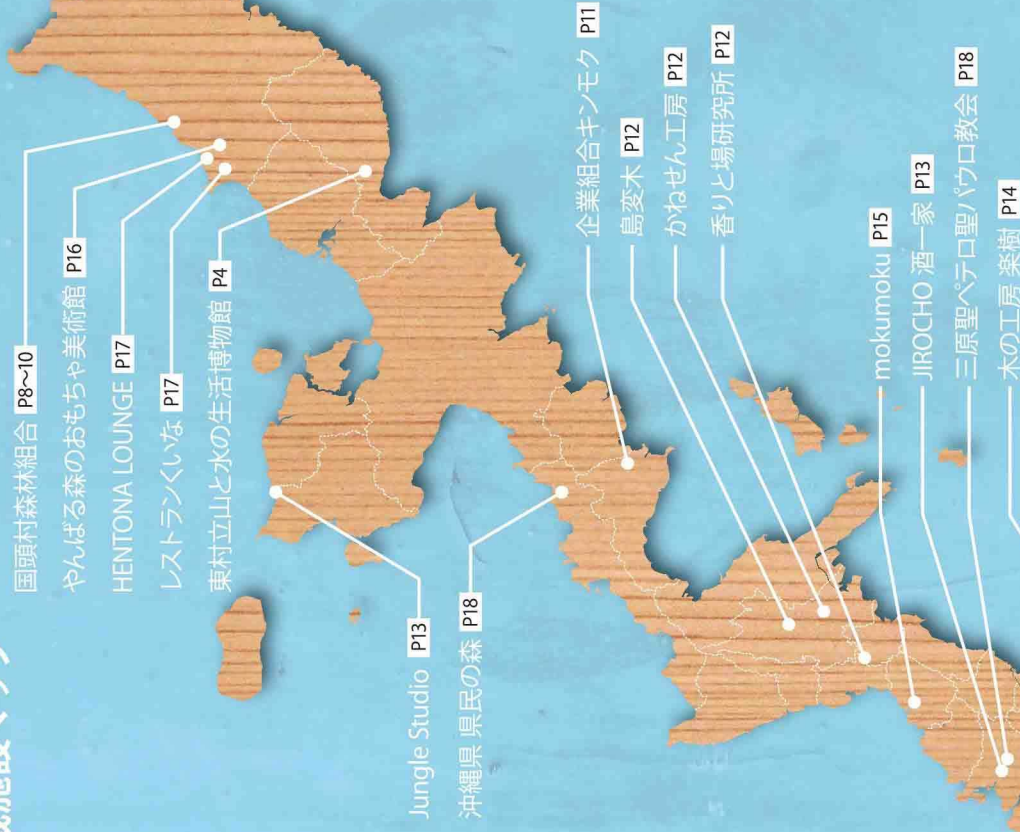
沖縄県産木材の種類

沖縄の木を生かす職人たち

暮らしに木を取り込む国頭村

「木育」は誰にでもできる取り組み

掲載施設マップ



世界から注目を受ける中、 人とやんばるの森が共に歩んできた 長い営みはこれからも続く

県内随一の規模を誇るやんばるの森は、

イタジイ、リュウキウマツ、イジュなど多種多様な樹種の宝庫。

古くから木材の一大産地として、人々の生活に重要な役割を果たしてきた。

琉球王国の時代から、やんばるの森は王族や庶民を問わず身近な存在であり、

中でもやんばるに住む人々は、森林を生活の基盤とし、

森と寄り添うように暮らしてきた。

長い歴史の中で、木材の旺盛な需要に応える形で

幾度となく直面した荒廃の危機から立ち直ったのも、

そうした思いが紡がれてきたからこそ。先人の絶え間ない努力が実り、

やんばるの森はいま充実した時期を迎えている。

県内の各森林組合では、木の収穫や木材の加工などを行うとともに、

森の管理や保全活動にも従事。

現代に合った人と森の新たなつながりを築くべく、

さまざまな試みに取り組んでいる。

さらに、森から生み出された木材は沢山の人の手にわたり、

思い思いに磨きあげられ、おきなわの木の可能性を訴えている。

民謡にうたわれた林業の歴史 国頭さばくい (くんじやんさばくい)



沖縄全域で古くから親しまれている労働歌の一つ。琉球王朝時代、船積した木材を首里城へ搬上するときの情景をうたったもので、国頭の身那覇屋中間にある、同村山が森神社とされる。同村山の国道58号沿いには記念碑が建つ。

世界に誇るやんばるの森の“これまで”と“これから”

歴史 琉球の時代から やんばるが林業の中心地

今も昔も沖縄の森林・林業の中心は、本島最北部に広がる「やんばる」といわれる地域である。海岸部を除くほとんどの土地が亜熱帯常緑照葉樹林の森に覆われており、多様性に富んだ豊かな自然を形成。現在はこのやんばるにまたがる国頭村・大宜味村・東村の3村だけで、県全体の森林面積の約4分の1を占める。

やんばるの森はまた人々の暮らし、産業・文化を支える森林資源としての顔も持つ。15世紀に琉球王国が興り勢力を拡大するにつれ、首里・那覇をはじめ本島中南部を中心に建築・土木、造船などの用途で木材の需要が高まり、資源量の豊富なやんばるはその供給拠点の地位を確立。やんばるの人々は、自らの生活に必要な木材を森から得るとともに、切り出した木材を中南部へ送って生計を立てた。17世紀には「植山制度」と呼ばれる山林政策がとられ、王国の管理下で森林管理が行われた。

明治期から戦前、戦後にかけては、動乱の時代背景の下、過度な伐採により荒廃が進んだものの、徐々に回復。国を挙げて大規模な造林事業と森林再生に向けた住民の努力が実を結び、やんばるの森は現在、沖縄の長い歴史の中でも、資源的に充実した状態にある。

現在 自然環境の保全と 森林利用の両立を図る

戦後の荒廃から立ち直った現在のやんばるの森を維持し、より豊かな環境に育てていくには、人と森林の新たな共生関係を築く必要がある。具体的には、ノグチケラやヤンバルクイナをはじめ、希少な野生動物が生息、生育する多様性に富んだ自然環境を保全するとともに、適切な計画に基づき、木材ならびに林産物の活用と循環のサイクルを築いていくこと。さらには近年になって、自然との触れ合いを求めてやんばるを訪れる人が多くなり、観光や健康増進、環境教育の場としての利用ニーズが高まってきた。

こうしたことから沖縄県では、2013年に「やんばる型森林業の推進に向けた施策方針」を公表。2万7161ヘクタールに広がるやんばるの森林を、重視すべき機能に応じた利用区分（ゾーニング）を行い、守るべき場所と、活かすべき場所とを明確化した。現在は区分ごとの活用方針に基づき、さまざまな施策を展開している。

そして2016年にやんばる型森林業での利用区分を踏まえた上で、やんばるの陸域と海域を合わせた約1万6300ヘクタールが国立公園に指定され、2018年に目指している世界自然遺産登録に向けての法的な条件をクリアした。

展望 世界自然遺産と これからのやんばるの森

やんばるとして、どのような世界自然遺産を目指すのか。国・県・地元関係機関などが作成した「亜美・琉球世界自然遺産」の管理計画では、やんばるを含む各エリアを、顕著な普遍的価値を持つ「推薦地」、推薦地に隣接する「緩衝地帯」、これらを取り巻く「周辺地域」に分類。推薦地は、国立公園法規制により厳格な保全をうける一方で、当該地域の森林は、古い時代から地域の生活や産業に利用されてきた歴史があり、適度な人為的擾乱を受けつつも豊かな生物多様性が維持されている本地域の特徴を踏まえ、緩衝地帯と周辺地域については、引き続き持続的に森林資源を活用すると明記されている。

これは、世界自然遺産登録を契機に、地域に優れた自然を適切に保全する一方で、賢く活用を図り、山村地域の振興に繋げるという地元の強い決意の表れと言えるだろう。

林業は本来、自然と向き合う持続可能な循環型産業である。現在のやんばるの森は老齢林化が進んでおり、木材利用を目的とした場合、伐採適期に達している41年生以上の森林が割合を占める。「守るべきエリア」は確実に守り、活かすべきエリアについては、種を育てる→使う→種を、といった一連のサイクルをスムーズに進めていくことが、健全な森林の管理につながる。

お米むら コラム 市民の生活を支えてきた自然や歴史を学ぶ 東村立 山と水の生活博物館

県や東村のシンボルに指定されている鳥「ノグチケラ」の研究目的として平成16年にオープン。また、博物館が建つこの場所は、昔は山から切り出した原木の集積所「タムンサー」と呼ばれ、木材を本島南部などへ輸送する山原船に運び込まれたための作業場であった。館内の一角に原船に運ばれた同コーナーには、当時使われていた農作業の道具や山から担いで運ぶために使われた薪の種類の、丸太、ヤンバル竹などを展示。かつて東村民の暮らしを支えてきた山仕事の様子に触れることができる。他にも、やんばるの森を再現したジオラマや野鳥、動物の剥製標本、東村の大聖年表なども展示。



住/東村字川田61-1
☎0980-51-2838
営業/10:00~18:00(入館は17:30まで)
休/月曜日(何曜日か当日の都合は公式HPが休館)、祝日、重慶の日、年末年始(12/29日~1/3日)、その他、臨時休館(要予約)
<http://yamamizu.vill.higashi.okinawa.jp>

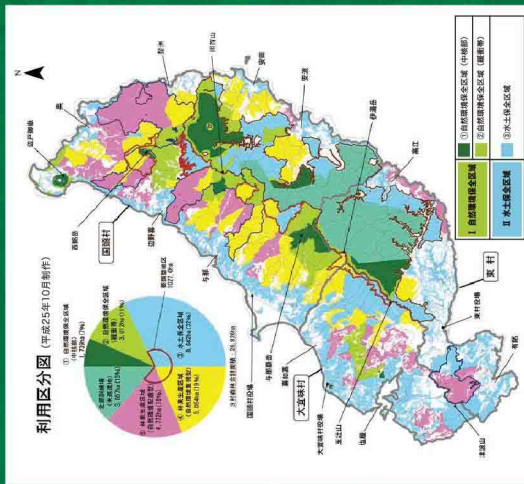


※五支名称(奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島)世界自然遺産

やんばる型森林業の推進

① 森林の利用区分(ゾーニング)

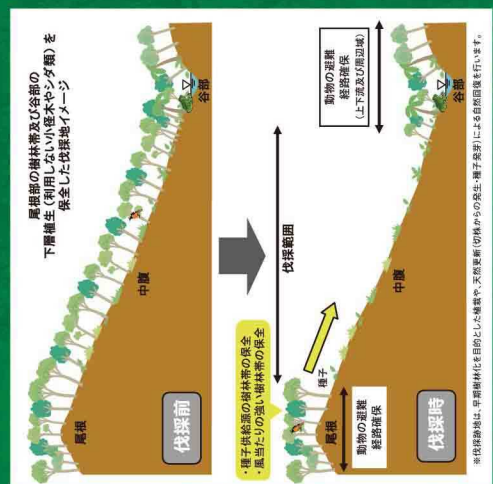
森林の多面的機能を十分に発揮させ、計画的な森林利用・適切な森林管理を進めるため、森林の持つ機能の中で重視すべき機能に応じて、守るべき区域と活かすべき区域の設定を行う。



② 森林施業、森林整備の改善

森林施業、森林整備については、さらなる環境保全対策の向上及び環境負荷の低減のため、これまでの取組を継続した上で、利用区分に応じて、その改善を図る。

択伐の推進
択伐の実施に向けて、現地に適した取組手法の確立、技術取得支援等の人材育成、林業機械の導入等の条件整備を図るとともに、択伐の実証試験を兼ね、さまざまな課題の解決を図り、試行をとおして択伐を推進していく。



③ 特用樹等の活用推進

環境負荷の低い保全型の林業・林産業として、樹木の葉・葉・花等を利用する特用樹の活用を進めていく。

特用樹は、付加価値の高い新たな森林利用として、現在、在来品種からさまざまな用途、製品の開発が進められており、自生する樹木の活用とともに、今後は、これらの特用樹の植栽も進めていく。

特用樹の活用事例

特用樹	活用事例
オオバコ	洗剤、除菌剤、消臭剤、化粧料
タイワンハンノキ	消臭剤
ニッケイ	香料、染料
ヤブアザミ	化粧品、香料、石鹸



《参考資料》沖縄県 農林水産部 森林緑地課「やんばる型森林業の推進」環境に配慮した森林利用の構築を目指して〜取組方針(案) 平成25年3月
沖縄県 農林水産部 森林緑地課「やんばる型森林業の推進」環境に配慮した森林利用の構築を目指して〜平成25年10月

沖縄県産木材の種類

やんばるの森を構成する木々は個性派ぞろい。木材としての用途もバラエティに富む。



アカギ

(タカトウダイ科)
気乾比重：0.68 / 曲げ強さ：777
方言名：アカギ

県内で最も赤味の強い木材であり、その特徴的な色に惹かれる人も多いが、乾燥時に変形や割れが生じやすいのが難点。他の材と組み合わせてアクセントとして活用されることも。伊勢神宮遷宮式に用いる刻の柄として献納された歴史もある。首里金城町の大アカギが有名。



イジユ

(ツバキ科)
気乾比重：0.72 / 曲げ強さ：1,220
方言名：イジユ、イス

やんばるではイタジイの次に蓄積が多い。琉球王朝時代から建築材の主要木で、他の樹種と比べて真っすぐな材が取りやすく、柱、梁などに使用されてきた。県内で主要な造林木の1つ。ほのかに紫色を示し上品な木肌をしている。



イスノキ

(マンサウ科)
気乾比重：0.78 / 曲げ強さ：1,110
方言名：イス、エシギ

沖縄では山地に自生し、屋敷林、防風林、街路樹として村落や宅地に植栽されてきた。強度があり、茶紫色の高級感がある材色で、建築資材や家具材をはじめ、三線の竿材、箸やスプーンなどの小物としても活用される。イジユに並ぶ主要な造林木の1つであるが成長が比較的遅い。



イタジイ

(ブナ科)
気乾比重：0.61 / 曲げ強さ：1,032
方言名：シイジャー、シイギ

プロコリーの森とも称されるやんばるの森の代表的な樹種。琉球王朝時代から庶民用の建築用材として用いられるとともに、以前は枕木などに利用されてきた。最も資源量が大きく、シロアリにも強い。付加価値の高い活用を検討している。



イヌマキ

(マキ科)
気乾比重：0.52 / 曲げ強さ：837
方言名：チャーギ、ケーヤギ

1000年以上前から使われてきた針葉樹。耐久性・耐腐性が強く強度にも優れ、県産材の中では最も貴重な建築材として扱われ、古くは柱や梁、土台などの構造材にも活用されてきて、現在でも沖縄の古民家を再現する際には、床柱や雨端の柱、垂木等への需要は多い。ただし、虫害の発生により極めて資源量が減少し、十分な供給量が得られないのが課題。



エゴノキ

(エゴノキ科)
気乾比重：0.55 / 曲げ強さ：892
方言名：シチャマギ

琉球漆器の主要素材。他には床柱や玩具、土木資材などの用途が見られる。大きな特徴は、反りやねじれなどの狂いが少ないこと。さらに材は淡黄白色で肌目が細かく、比較的強度にも優れている。



クスノキ

(クスノキ科)
気乾比重：0.55 / 曲げ強さ：827
方言名：クスヌチ、クスギ

沖縄では琉球王朝時代から造林され、木造船用材に用いられた。以前は樽罎(しょうろう)を取るために植えられており、特有な芳香を放つ。材は黒味や赤味が入り、木目も複雑で味わいのある表情を持ち、材の加工も容易なため、家具等に多く用いられる。



センダン

(センダン科)
気乾比重：0.50 / 曲げ強さ：779
方言名：シンダン

成長が早い早成樹種の1つ。比較的赤味が強く、木目ははっきりしている。古くから家具材として親しまれ、「娘が生まれたら庭にセンダンの木を植え、結婚するときはそのセンダンの葉入りダンスを作って持たせる」という言い伝えがある。



ハマセンダン

(ミカン科)
気乾比重：0.42 / 曲げ強さ：674
方言名：ヤマグルチ

センダンに並ぶ早成樹種の1つ。軽く変形が少なく、加工しやすい材の特色を生かし、食器や弁当箱、小物入れなど箱物の小物類が多く作られる。板面は淡い黄白色で光沢があり、無着色のクリアな塗装仕上げでも美しい。中には高さ10m以上まで成長する大木もあり、大きな家具製作も可能。




リュウキユウマツ

(マツ科)
気乾比重：0.70 / 曲げ強さ：936
方言名：マチ、マチギ


琉球列島の固有種で、沖縄の県木。材積量の多さから古くから多方面で利用されてきた。白いワイルド地に黄茶色の年輪が縞模様を作る木目は美しく評価されている。広葉樹に比べ、乾燥が比較的容易なため、さまざまな用途での活用を進めているが、病害虫による枯れの被害があるためその対策が課題。

沖繩が誇る3本の名木
沖繩の巨木


悠久の時を超え今もなお轟々しく鎮座する3本の名木を紹介。地面を這う根張りが見事な樹齢250年余の久米島の五枝の松と推定樹齢200年以上と置われる首里金城町の大アカギと共に国指定天然記念物。そして、琉球王朝時代に政治家 蔡温が今傳に植えたとされる松茸木の中原馬場など見事な姿を見せてくれる。



「五枝の松」



「大アカギ」



「中原馬場」

【気乾比重・気乾密度】木材を乾燥させた時の重さを比べた値。値が大きいほど重い材。
【曲げ強さ (kg/cm²)・曲げ強度 (N/mm²)】曲げ強さをあらわす指数。この値が大きいほど強い材。

《参考資料》琉球林業協会「沖縄県産木材の性質と利用」／沖縄県森林資源研究所センター「沖縄県産木材活用ハンドブック」

国頭村森林組合

たくさんの人が手編にかけて育てたやんばるの森。切り出された材木は工場施設へ運ばれ、用途ごとに加工されて県内全域へ出荷される。林業・木材産業に生きる人の姿は、木々の香りのようにすがすがしい。



沖縄特有の樹種を育てて生かす生態系を守ることも大切な務め

やんばる3村の中で最北部に位置する国頭村で、森林整備と自社工場での製材を行う。約1万6000ヘクタールもの森林を管理し、その多面的機能を維持するために、選林・保育・伐採・搬出・利用という森林の循環利用に取り組む。案内してくれた同組合職員の比嘉進さんと一緒に山に入り、作業現場を回る。

「本土の人工林は、スギやヒノキに代表されるように針葉樹が多いのに対し、沖縄は広葉樹が中心で、イタジイ、イジノ、イヌノキ、クスノキなど樹種が豊富な点が特色です。また痩せた赤土や台風時の塩害などの影響で、成木しても背が低く、真っすぐ育たず途中で曲がる木がほとんどです。そのためスギやヒノキのように建築の構造材にはできません。代わりにこの曲りやひねりを生かす手だてとして、家具材にしたり化粧材にしたり、2017年からは新たに銘木の販売も始めました。」

伐採する樹種・面積はそのときどきの需要で決まる。近年は毎年約10ヘクタールの木を切り出し、工場加工して出荷する。その後は2、3種類の苗木を混ぜて植林し、成長の妨げになる雑草や低木を刈り取って下刈をしたり、5年を経過したら木々の間隔が窮屈になりすぎないように間伐をしたり手を加えて、約10年間かけて保育。あとは

収穫適期の40年生以上になるまでじっくり待つ。

「伐採する場所は、森林の全体的なバランスを考えて、前回とはなるべく離れたエリアを選びます。植林するのは廃占種のイタジイ以外の樹種が多いですね。林業の仕事は、一見体力勝負のようにも見えますが、専門知識と経験が要求される技能職。若手へのスムーズな技術継承が今後の課題です。」

保育期間後の森は、伐採まで放置するだけではなく、保全・管理することも組合の仕事だ。夜間には職員が交代制で森林パトロールを定期的に実施。希少動物の違法採取の警備や監視にあたっている。

「世界自然遺産登録を目指しているように、やんばるの森は希少生物の宝庫。健全な森林を育成し、やんばる全体の価値を高めるには、生態系を守る必要がありますからね。」

おきなわ しまくとぅば コラム

やんばるの父 蔡温

蔡温は琉球王國の三百年を築いた政治家の家に、山林の保護育成のために、地山政東王が管理し、許可制で一定の一般利用が可能な森林資源を運び、一帯の森林資源の回復に成功した。



蔡温は琉球王國の三百年を築いた政治家の家に、山林の保護育成のために、地山政東王が管理し、許可制で一定の一般利用が可能な森林資源を運び、一帯の森林資源の回復に成功した。